2021年
7月8日
木曜日

喜びに飢えた世界

井口　泰　教授（労働経済学）

讃美歌21：479番　ドイツ讃美歌集　EG398「喜びは　主のうちに、愛するイエスよ。苦しみのきわみにも　恵みは豊か。主に望み置くものは　とこしえの生命うけ、救われる、ハレルヤ。生きる時、死ぬ時も。主イエスから離すもの　何もない、ハレルヤ。」

聖書　ペテロ第一の手紙　第1章8－9節「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。」（新共同訳）

聖書によって、私たちは、今から約3000年前のダビデ王の時代、2000年前の古代ローマ帝国の時代にも、戦争、迫害、飢餓、疫病の連鎖が起きていたことを知ることができます。21世紀の現代も、世界金融危機、世界同時多発テロ、巨大災害に加え、新型コロナウイルスによるパンデミック（世界的な感染拡大）が1年以上も続いています。世界経済は今後も、不確実で想定できないショックに直面すると見込まれます。

感染の拡大は、病院や介護施設の機能を麻痺させるだけではありません。家庭内に感染者を抱えた家族の苦難は想像を超えていました。将来、公共交通機関や物流機能にも影響が及ぶと、日常生活が麻痺する事態もあり得ます。現在、食料や日用品の流通が止まったり、価格が高騰する事態が起きないのは、国内外に広がるサプライチェインを必死に維持しているからです。

パンデミックの長期化から、行動制限が強化されて、人々の日々の出会いの場が奪われ、私たちの喜びを奪いました。文化や芸術活動が停止され、国内外の移動が、最低限にまで制限されました。多くのイベントの停止は、芸術家の生活の基盤を破壊して、文化の持続性を奪います。飲食・宿泊業は、2010年代を通して国内需要の縮小に苦しんできましたが、インバウンドの外国人観光客の消滅で、地方創生の夢が絶たれたかのように見えます。

こういう時代に、人々は、どのように生きる喜びを感じることができるでしょうか。こうした厳しい状況下で、日常の喜びによって隠されていた「あなたはなんで生きているのですか」という問いが、頭をもたげてくるのです。これは、非常に貧しい国々の人々が、苦しい日々の中で直面する問いなのです。どんなに貧しい国や地域でも、家族やコミュニティのお祝いやお祭り等、共に喜びを分かち合う出来事には多大な資源を投じていることが判っています。

こうした中で、聖書が語る「喜び」とは何でしょうか。私たちが日常使用する「喜び」という言葉と、聖書の「喜び」は異なります。今日の聖書の箇所で、「見たことがないのに愛し、今見なくても信じており」というところが極めて重要です。聖書における喜びは、自分自身の楽しみや利益ではなく、兄弟や隣人の喜びなのです。そういう人たちの喜びになるところに、目に見えないけれど、キリスト・イエスが来られるという希望を、使徒たちや古代教会の人々が抱いていたことを知ってください。

このような意味でも、大学において、皆さんの海外への留学と、新規の外国人留学生の入国が厳しく制限されるのは、私には耐えがたいことです。新たな世界や隣人との出会いが、私たちの人生・キャリアの形成や信頼に満ちた世界の創造にとって不可欠です。一方では、国民の健康や安全を守りながら、長期的な視野から、若い世代の交流を順次拡大することの必要性を強く訴えたいと思います。■